

『桐火桶号志気』の「裏書」について

要旨

藤原定家に仮託されて成った歌論書のうち、主要なものは、いわゆる鶉鷺系の四部の書である。その四部の一つ『桐火桶』は、本文に幾つかの系統が存し、中でも「桐火桶号志気」系統は最も増補の著しいテキストと目される。当該テキストには、少なからぬ分量の「裏書」が組み入れられており、増補の様相、ひいては『桐火桶』という書の生成の問題を考える上で興味深い。小稿では、この「裏書」の実体と意義を明らかにすることを旨とする。もって定家偽書研究の方法を求めるよすががともしい。付録として、近代通行の活字本では割愛されている当該「裏書」の本文を翻刻する。

川平ひとし

はじめに

定家偽書のテキスト批判においては、理念的に想定された正本を目指し、単一な方向での還元論的な遡源ではなく、むしろ、複雑に連関しながら伝存しているテキスト群に即した、生成論的な動態分析こそ求められるのではなからうか。

右の観点とそれに伴う視野や用語（ならびに用語法）については既に別稿で⁽¹⁾略述したが、こうした認識に立つと、同稿で例示し今ここで改めて検討しようとする『桐火桶』諸系統のうちの「桐火桶号志気」という名で伝わっている一類は、定家偽書研究のあるべき方法について重要な示唆をもたらす事例となるに違いない。

『桐火桶』の綿密な伝本整理を試みた佐藤恒雄が一つの系統（「第四類本」）として立てている当該の「桐火桶号志気」系統のテキストは、簡略に言えば、他系統に比べて最も多く増補の加わった本文を持っている。而して、小稿で取り上げるこの「桐火桶号志気」系統の本文中途に見える「裏書云」で始まる部分は、他の系統本には存在しない独自異文であり、まさしく当の増補の要点ともなる箇所である。しかもこの「裏書云」の後には、「桐火桶の類とは」云々（以下に引用する裏書の本文は東北大学附属図書館蔵狩野文庫本（後述）による。論末の「付録」を参照）という注意すべき文言が続いている。眼を転ずると、裏書箇所の直前にあるのは諸系統共有の「桐火桶」をめぐる一連の叙述であり、周知の、桐火桶を抱いてうそぶき詠ずる俊成のあの逸話を含む部分に他な

らない。すなわち当該の「裏書」は、書名の由来ともなる「桐火桶」の概念内容を敷衍・説明するかのような形で本文に挿入されており、『桐火桶』というテキストの歌論内容の核心に触れる問題と深く繋がるものであると言わねばなるまい。しかしながら、近代、今日に至るまで行なわれてきた『日本歌学大系』第四卷所収の活字本文においては、「桐火桶号志気」本文の少なからぬ分量を占めるこの「裏書」の部分が割愛されている。おそらく「訂補誤脱畢」（同大系本巻末註記）という処置のもとに、余剰の部分と認定されて削られたのであろう。大系本は「桐火桶号志気」系統本に属する内閣文庫本（後述）を、板本などの流布本に対する「異本」と位置づけた上で採用し他本をも参酌したところの校訂本文であり、奥書をはじめとして確かに「桐火桶号志気」系統本の本文の体裁を備えているが、それでいて問題の「裏書」に相当する箇所を欠いているゆえに、結果的には、現存する『桐火桶』諸系統のいずれにも属さない、そしておそらくは実在するどの伝本とも一致することのない本文となっているのである。ここには歌論書の校訂本文作成上の問題点⁽²⁾があらわになっていると言わねばあろう。

しかし一方、『桐火桶』研究の現状は、右のような本文に対する選択的な処置を対象化して、より精細なテキスト批判の道へと進むべきことを私たちに要請している。すなわち、先駆的な田中裕の、伝本の吟味と歌論内容の精読を噛み合わせて定家の認識像とは異なる仮託書独自の論理を探索しようとする試み⁽⁴⁾、先ほど触れた佐藤恒雄の、徳川美術館蔵本の影印化に伴う包括的な伝本整理⁽⁵⁾、現在進行中の吉原克幸による註釈作

業、そして冷泉家蔵一本の影印化と島津忠夫による書誌的再検討⁽⁶⁾、などの研究史の蓄積を踏まえると、おのずとテキスト批判もまた方法や観点の急進化を促されるであろう。小稿はそうした課題に応える一つの試みである。

一 名義考

最初に「桐火桶号志気」という名称について考えてみよう。「桐火桶」は暫く置いて、「号志気」とは一体何だろうか。素朴に読めば「号」は「号(がう)す」で、呼ぶ・称するの意、「志気」は熟語。すなわちここは「志気ト号ス」と訓読して、「桐火桶」は「志気」という名を別称あるいは異名とする書であることを示すもので、「号志気」の三字は補任類の人名の尻付のように「桐火桶」という書名に対する註記として添えられているのだ、と解しておくのが自然かもしれない。事実、従来この本の名を引く際は、「号志気」を小書きにして「桐火桶号志気」のごとく表示するのが常であったと思う。

しかし、そう解するのには二つ難点がある。第一は、仮に「志気」が書名「桐火桶」の別号であったとして、『桐火桶』の現存伝本の中に、当該系統はもとより他系統も含めて、「志気」という名称自体を単独に(外題であれ内題等であれ)持つものは今のところ一本も知られていないことである。第二に、当該系統の現存伝本四本(佐藤恒雄により既に分類・確認されている)のうち慶応大学図書館蔵本のみは、内題の「号」字の下に僅かに空白を置いて「桐火桶号志気」と標示しているかの⁽⁷⁾

とくであり、同本の書写者は「志気」を別称だと理解して書き写したことを我々に推測させる。だが他の本においては、この種の意識の痕跡を窺うことができない。特に「号志気」を註として小書きした例の存在しない点は注意される。すなわち書誌的な事実による限り、「志気」は『桐火桶』の別名であるとする明徴は得られず、「号志気」は別名であることを指示した註記だと断ずることもできない。そうだとすれば、私たちは従来、暗黙裡に理解されてきたところとは別に、「桐火桶号志気」の名義について新たな見方をしてみるべきではなからうか。当面の問題は、「桐火桶」という書名の意味、そして『桐火桶』という書がこれほどまぢまちの名をもって伝わっていることの問題とも無縁ではないはずである。そこで以下、当該の名義につき、いくつかの可能性を考え、仮説をも導き出してみたい。

(1) 志気

仮に「志気」を仮名とみれば、「しけ」である。万葉集の用例、

之気 之気伎 之気吉 之気久 思気久 之気思 思気志

などを考え合わせると、和語として自然な訓みは「しげ」と濁るべきだろう。⁽⁸⁾とすると「号しげ」になるが、それは書名の趣意をよく表示し得たものとは見えず、意味不明瞭であって採用し難い。むしろ「志気」を仮名と見ずに漢字のままに解して「志気(シキ)」と読み、その語義を考えてみたい。

言うまでもなく漢語としての「志」「氣」そして「志気」はいずれも

永い用例史とそれぞれの概念史を持っている。それらと当面問題の「号志気」はどのように関連していただろうか。『桐火桶』成立の時代——それは何時かこそ、まさしく難問であるが、ここではおおよそ中世と置いておく（後述）——の言語状況を考え合わせるとき、宋学の用語圏にある、たとえば、「志久。則気久。徳性久。」（『正蒙』至當篇⁹）や、『孟子』公孫丑章句上の、

夫志氣之帥也、氣體之充也、夫志至焉、氣次焉¹⁰

をとらえて「志」「氣」の大小、先後、分別などについて問答する『朱子語類』（巻五十二）所載の言説などから窺える「志気」の概念は、「号志気」という表示を生み出す背景や契機として十分働きたと考えられる。一方、十三世紀中葉の本邦禅宗において「志気」は既に親しい語として用いられていた。特に注目されるのは道元における用例で、『正法眼蔵』に「志気」（ただし「しいき」という慣用音）の例が多数存する¹¹。ほか、『正法眼蔵随聞記』に「好事をば他人に譲り、悪事をば己れに迎ふる志気あるべきなり¹³」とあり、また、

直饒（たとひ）会（ゑ）に誇り悟に豊かにして、警地の智通を獲、道を得、心を明めて、衝天の志気を挙げ、入頭の量有りと雖も、尚出身の路を欠く。
（『普勸座禅儀』天福元年（一一三三））

文字を先とせず、解会を先とせず、格外の力量有り、過節の志気有りて、我見に拘らず、情識に滞らず、行解相応する是れ乃ち正師なり。 （『学道用心集』「参禅学道は正師を求むべき事」天福二年¹⁴）
などの用例からもその語義・語感を知り得る。もとより「号志気」の「志

気」は道元の用語、ひいては曹洞宗の用語圏から直接生まれ出たと即断することはできない¹⁵。広く用例を探してみるべきであるが、惣じて「志気」は中世、ことに禅宗においては既に熟した概念として定着・流布していたと考えてよい。

注目されるのは、以上のような外在的な諸用例ではなく、「桐火桶号志気」の本文そのものの中に、「志気」の例かと目され、ひいては「号志気」の名義を考える上での内部徴証にもなるかと思われる箇所があることである。すなわち、万葉集歌・古今集歌を抄出し、「うたの本」や「稽古」の論ののち、定家詠二首（拾遺愚草・下・秋二二四三・二〇五二）を引き、これを俊成がなめならず「褒美」したことを述べた次に、家隆歌（壬二集・下・冬二五九八）を掲出、コメントを加えている段に見える。注意されるのは、「志気」の語が「桐火桶」という語と直接結び合う文脈の中で用いられていること、当該の「志気」は「号志気」系統本と一部の限られた伝本のみに見え、かつ前後に同系統本特有の増補部分を含んでおり、系統判別の「指標」の一つとして佐藤恒雄が抽出した箇所¹⁶に他ならないこと、などの諸点である。やや長くなるが、この段を以下に転記してみよう。

家隆卿歌に、遠村雪

秘歌

あらしふくとをやまもとの村柏

たか軒端より雪払ふらん¹⁸

是を語申たりしかは、数返高吟し給ての給はく、此歌こそ秘歌とも

申へけれ、能も思ひよれる物かな、志氣か桐火桶の歌程の事にこそとのたまひき、縦は北国などに大雪ふり侍也、軒も垣ほもひとつに降り埋れる時、長竿の先にまけたる輪をつけて、やねの雪を拂おとす也、是をかしはと云也、遠村の雪にうちむかひて遠山本のむらくなる雪をは、たか軒端よりはらふらんと思ふへし、能も村の字に當れりとて、或^{盛方}涙に咽給へり、御けすらひ、いとうらやましくも

ちなみに群書類従本（巻三〇〇）と対照すると、類従本では「秘歌」の肩註はなく、歌に続くコメント部分も左記のように簡略である。

是をかたり申たりしかは、すへん高吟し給て、此歌はよくおもひよるものかな、桐火桶の歌ほとこの事にこそとの給き

逆に言えば、「号志氣」系統本文の記事の増加ぶりを端的に知ることができる。その増加の要点は、歌の釈義が詳細化している点と、俊成の感銘する様とそれに対する定家の反応がやや誇張を伴って書き加えられている点だとしてよいだろう。

さて問題の「志氣」の語は右の類従本には見えない。この類従本を含む（佐藤の分類にいう）一類本をはじめ、二類本そして五類本（異本）の、四類本「号志氣」系統ならびに三類本の一部を除く他系統は、惣じて「志氣」の語を欠いている。そもそも当該の段落は、『桐火桶』諸系統のいずれにおいても論述の中で、当書の鍵になる「桐火桶」という概念が最初に顔を見せる箇所当たっている。そのような脈絡の中で「号志氣」系統本は「志氣」という語とともに「桐火桶の歌」について語ることによって、『桐火桶』というテキストに他の類にはない新たな要素

を付加していることになるのである。

ただし細かに言えば、「号志氣」系統本でも次のように僅かに異同がある。先引の「志氣か桐火桶の歌程の事にこそとのたまひき」の部分のみについて同系統の東北大本以外の本文を列記してみると、

志氣か桐火桶の歌程の事にこそとのたまひき（内閣文庫本）

志か桐火桶の歌程の事にこそとのたまひき（慶応大学本）

志氣か桐火桶の歌程の事にこそと（九州大学本）

のごとくである。「志氣か」は「志氣が」の意だと解される。慶応大学本は「志か」の「か」に朱濁点（同本の全体に施されている）を付している。「こころざしが」と読まれたのであろう。ちなみに日本歌学大系本には、「志しける桐火桶の歌」云々とある。先述のとおり同大系本は上で参照した内閣本等に基づいて活字化している。おそらく、「志氣か」の「か」を、字形の似る「る」と読み、「志氣」は熟語と取らず、「志」（こころざし、と読まれたであろう）に「し」を送り、「氣」を仮名と見て先の「志しける」という本文になったかと推測される。

この「志氣」は、先ほど記したように「号志氣」系統本以外にも、三類本「幽旨」系の、内題に「幽旨」と記された諸伝本を中心として見られる。ただし、それらのうち静嘉堂文庫蔵本（一〇五・五・一八六八九）に「しけか（志計可）」とある他は多くが「しける」である。すなわち、志ける 東京大学文学部国文学研究室蔵本（中世・一一、二・二二一、

内題は「玄旨」・書陵部蔵本（一五〇・七二七、用字は「志

希留）

しける 彰考館蔵本(巳・二〇・〇七五七八)・天理図書館蔵本

(九一・二・一〇一)・叡山文庫蔵本(真如蔵・外・五一

・二〇・三二四)

のごとくで、他に鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫本(地六・二〇九二)の「志けり(志个利)」も存する。「志」の字母が根強く保存されているのは注意されよう。

以上の異同を点検して、「志気」についての先後関係を推測すると、初形は「志気か」で、「志気か」―「しける」―「しける」という派生の過程を辿ったのではなからうか。

右の想定に立って読めば、当該の「志気か桐火桶の歌程の事にこそ」は、(家隆の)一首に籠もる「志気」は「桐火桶の歌」と呼び得る水準にも達している、というような意にならうか。四類本「号志気」系統と三類本「幽旨」系統の一部の本文中に見える(ただし後者には、前者「号志気」系統に存在する先引の「縦は北国などに」云々以下の敷衍は、その他の諸系統本と同様に皆無である)、この「志気」なる語は、翻っていま問題の書名にいう「号志気」の「志気」とも底で通い合っているのではあるまいか。

(2) 号

称号・名号などの「号」に准じて「号志気」の「号」も、称える・名づけるの意と見て「志気ト号ス」と読んでおくという、おそらく穏便ではあるものの、前述のとおり書誌的な証左を欠く理解を、敢えて採らな

いでみてはどうか。ここで、先記した「志気」の用例を考え合わせて、

「志気ト号ス」ではなく、仮に「志気ヲ号ス」と訓解する場合を考えてみたい。すなわちその場合の「号」を、呼び寄せる・招き寄せる、の意として読むことはできないか。

中世、「号」が深い含意とともに印象的に語られるのは、たとえば親鸞和讃の「正像末和讃」にかかわる法語中に見える、

名の字は因位のとときのなを名といふ。号の字は果位のとときのなを号といふ。

などであろう。また漢字「号」に時代特有のニュアンスのあったことについては、(後代の所説ながら)伊藤東涯の『秉燭譚』(享保一四年(一七九二)自序)巻四「號字ノコト」に、

宋元已来ノ書今ニ至マテ號ト云コト多シ、日本ニテイハハ物ノシルシ番付ナトノコトナリ(略)⁽¹⁹⁾

とある。ただしこれらはいずれも上に提出した私の推測を直接裏付ける用例とはならないものの、「号」の字義のもつ広がりや語史について、なお検討すべき余地があり得ることを告げていると思う。

ちなみに『字鏡集』(寛元本)は「號」に「サケフ・ヨラフ・ナク・ヨバフ」、「号」に「メス・ナツク・ナヲシ」の訓をそれぞれ与えている。これらの訓から、上述の説に合うものを強いて選べば「メス」であり、また『倭玉篇』(慶長十五年版)の「號」の訓「サケフ・イカル・ナツク・ヨブ・ナク・ヨクリナス」から選べば「ヨブ」などであるが、今どの訓を採るかという問題にかかずらわることなく、「号志気」の「号」

を音のまま「ガウス(ごうす)」と読んで、呼び寄せる・招き寄せるの意と解し得る可能性を考えておきたい。

(3) 号志氣、桐火桶号志氣、そしてその他の書名

「志氣」「号」そして「号志氣」を以上のように解するとすれば、おのずと標題にいう「桐火桶号志氣」については、「桐火桶」「号志氣」の上下を分離するのではなく一体のものとして捉えることになる。その名義は「桐火桶が(は)志氣を呼びさます」もしくは「志氣を招き寄せる桐火桶」というほどのものとなる。これを仮説として提出しておきたい。ところで周知のように『桐火桶』という書は種々の名をもって伝存している。諸本の外題・扉題・内題などに、伝本系統によっては一部に収斂を見せながら「桐火桶」の名以外にも次のような書名が記されている。

秘抄 幽旨 玄旨 和歌玄旨 桐火桶要指

そして桐火桶号志氣。これらのうち「秘抄」は早く伝頓阿作の『桐火桶抄』に「或仁秘抄とてみせ侍し一帖秘抄」と見える。⁽²⁰⁾「秘抄」という呼称の見える伝本が、冷泉為秀の関与したと推定される(冷泉家現蔵本を含む)ものの中に存在するのは注目される。すなわち為秀は、すでに「秘抄」と称する本が流布してもいた『桐火桶』を「秘抄」の名のもとに書写(場合によっては一度ならず)したことになるからである。⁽²¹⁾「幽旨」という語は、『愚秘抄』の類従本等の本文巻末近くの「道の幽旨たゞ是にて心得べきにや」に見え、定家仮託書中に存する語彙群の一つと符合する。一旦は両者の連関如何を問うてよいだろう。

「玄旨」は、『正法眼蔵』に見え、『花園院宸記』に「予殊繫思於玄旨。造次顛沛(元亨元年(一二三二)八月十九日条・裏書)、⁽²²⁾『夢中問答』に「西来の玄旨」「教外の玄旨」を云い、一休『狂雲集』の詩句に「六年飢寒徹骨髓、苦行是仏祖玄旨」とあるなど、禅宗圏に見える語であるが、一方、天台本覚論の「玄旨帰命壇」もあって、禅宗のみに止まらない。「桐火桶要指」にいう「要指」もまた、これを「要旨」と同義と解すれば、たとえば『禅源諸註集都序』に「禅門要旨無是非」と見え、「玄旨」と同様に仏家の、それも禅宗の語彙の内にある。

「秘抄」といい「幽旨」「玄旨」といい、これらはいずれもテキストの内において、深遠・靈妙な奥秘の論理が語られるだろうことを示唆するような名となっている。⁽²³⁾こうした呼称の様相を眺めると、そもそも『桐火桶』という書には当初から固定した唯一の書名が存したのではなく、言わば、はじめにテキストありき、であって、或る種の名づけ得ぬものですらあるテキストがまず存在し、それに種々の名が冠されたというのが実状に近かったであろう。偽書・仮託書生成の機序を捉える観点から言えば、こうした命名に介在していたのは、書名を付したであろうプソイド・定家たちと、それらの区々の名を通じて本書を受容した人々との間に共有されていた、「定家の著書」に寄せる(テキスト幻想)である。そして重要なのは、まぢまぢの命名と照応するように、テキストも、おのずと担い手もまた唯一・単独ではなかったであろうという点である。こうしたテキストを取り巻く状況のもとで、「桐火桶号志氣」の系統は、『桐火桶』のテキスト群の中核にあるモノでありコトでもある(桐火桶)

を標題に掲げ、同時に「号志気」という一種の理念を帯びた語句を結び合わせて、独自の存在根拠を主張しているのである。

二 「裏書」探査

『桐火桶号志気』はその名とともに（先述のごとく）『桐火桶』というテキストに他の類にはない新たな要素を付加している。その「新たな要素」を、私たちは、この系統特有の異文の中に見ることが出来る。当の異文の最たるものこそ「裏書」に他ならない。以下、「裏書」の輪郭をたどってみよう。

(1) 伝本

他系統には存在しない「裏書」を持つ当該系統の伝本は、先記のように佐藤の挙げる次の四本で、いずれも江戸期を溯ることのない写本と見られる。改めて示せば次のとおりである。

- (1) 東北大学附属図書館蔵狩野文庫本（狩・四・一〇三二〇・一）⁽²⁴⁾
- (2) 国立公文書館蔵内閣文庫本（二〇二・一一七）
- (3) 慶応義塾大学図書館蔵本（九〇・九三・一）
- (4) 九州大学附属中央図書館蔵音無文庫本（五四三・キ・六）

各本の奥には、この系統通用の、

右唯傳一子古今灌頂奥書也

という原著者のものとも後人の加証奥書とも取れる一文があり、さらに、

為家女月日安嘉門院女四條

嘉禎丁酉三年仲春廿五日記畢

明寂判^{得イ} 定家法名也

の奥書が続いている。ただちに次のような疑問が浮上するであろう。為家の後妻の安嘉門院四條すなわち阿仏尼や、定家の法名である「明静」などに照らすと、不正確で据わりが悪く疑問の多いこの奥書は、どのような由来を語ろうとしているのか、出自・来歴を記すことで何を自己確認しようとしているのか、ここに記されている嘉禎三年（一一三七）定家七十六歳の年紀ならびに日付の意味は何か等々。これらはいずれも当テキストにおける擬（偽）託性のありかを尋ねるための重要な項目となるはずである。

(2) 分量と構成

問題の「裏書」箇所を純粋に量に還元すると、東北大本でいえば、奥書を含めた本文墨付き七十三丁のうち約三十丁分、内閣文庫本でいえば七十四丁のうち同じく約三十丁に相当する。まさしく少なくない分量であろう。「裏書に云」で始まる箇所の特徴についていえば、(1)(2)は、この語句を行頭に置くけれども、(3)(4)は改行せず本文に続けて書写しており「裏書」の箇所はやや目立たない。この書写形式は「裏書」の末尾の扱いとも照応している。すなわち後続との間に一行余白を置いて「裏書」部分を際立たせている(1)(2)に対して、(3)(4)に余白はなく、「裏書」を特別視する意識が相対的に薄いととも言えよう。ともあれ、これらの諸伝本がこぞって「裏書」を有している

ことに変わりはなく、問題はその内実である。

さて「裏書」の内容は、「裏書に云」以下にある数行の文言ののち、まず式子の「桐のはも踏分かたく成にけり 必人を待となけれと」を掲げ、それに対する註文を付す。以下同様に歌一首ごとに註を添えるという形式で、都合八十六首の歌と註が並べられている。

(3) 前後関係

「裏書」の部分と先行・後続の各部分との繋がりに注意しよう。先述とおり、この部分に先行する部分は「桐火桶」の語が集中して記されている『桐火桶』の眼目ともいふべき箇所⁽²⁵⁾に他ならない。すなわち、先に例示した家隆歌に対して「志気か桐火桶の歌程の事にこそこのたまひき」と俊成が語り、定家歌についても「其は随分桐火桶の歌にて侍る」と評し、さらに、

哀桐火桶の類哉とて……

亡父卿は……桐火桶を抱て臂を彼桶にかけて、閑疎寂寞として床の上⁽²⁵⁾に嘯て読給ける也(他系統には「閑疎として」あるいは「閑寂として」)

のごとく、俊成の語り⁽²⁵⁾と俊成の振舞を記した中に、しきりに「桐火桶」の語が登場するくだりである。そもそも『桐火桶』に見える「桐火桶」という語の用例は上記の四例であるが、「桐火桶号志気」系統では、上掲の「嘯て読給ける也」の後に通常他系統に「さてケ様に仰られしにや」とある一文の代わりに

しかればこそ能歌を聞給ひては、哀桐火桶の歌よと宣ひき

とあって「桐火桶」が用いられ、さらにその上に当該の、

裏書に云、桐火桶の類とは……

が加えられるのである。これら六例によって「号志気」系統では「桐火桶」の印象が一段と強調される。そうした文脈を励起する支点ともなる箇所に「裏書」は挟み入れられているのである。

目を転じると「裏書」の後の部分には、人丸以下の諸歌人の歌々に例の譬喩による評を添えて列挙した、諸系統共有の本文が続いており、もちろん「号志気」系統本もこの部分を備えている。ただし、ここにも僅かながら、しかし重要な手入れが施されている。すなわち、歌人評の前には、諸本とも次のような文章が置かれている。

抑、いにしへより今をよふまで歌仙とおほゆる人々についてにえらひ出して、少々そのうたのすかたを物になすらへて申侍へし

この文章が導入となって(上記引用の次にもう一文あるが省略)、後の独特の譬喩による(「物になすらへ」た)評へと自然に続くのである。しかし「号志気」系統本には、「物になすらへて申侍へし」が「物にならへて申侍し」とある。末尾はおそらく「まうしはべりし」であり、前者を改変したのだと考えられる。この手入れによって「なすらへ」の意味と後続の歌人評との接続はやや曖昧となるものの、記し来た少なからぬ分量の歌註を承け、「裏書」を付した趣旨を述べて文脈を締め括ることになるのである。以上のような「裏書」の前後の繋がり、言い換えれば文脈の整合化から生み出されるものこそ、「号志気」系統の、他系

統と異なる性格である。ここに私たちは擬(偽)託性の一端をかいまみることができ、同時に背後にある、プソイド・定家の意図と、同人のテキストを物する主体性をも見ることができるとは違いない。それらを集中的に体现しているものこそ「裏書」である。

(4) 冒頭文言

「裏書」の冒頭部分を転記してみよう。狩野文庫本では五行分に相当する。

裏書に云、桐火桶の類とは六十以後のうた也、又或時宣き、秘歌と申は大事の歌と申事少は異同有へし、秘歌と申は唯傳一子の類、大事の歌と申は沈吟して出来ぬる類なるへし

前段で再三取り上げている——確かに把握されてはいるであろうが、しかし「程」類などの漠然とした水準や境地としてのみ語られている——「桐火桶」の歌を「六十以後のうた」と明示し、次いで俊成の見解であると断った上で(「宣き」、「秘歌」と「大事の歌」を立てて相互の差異と性格規定に及んでいる。いずれも他本には見られない新たな積義であり意味付与である。そもそも『桐火桶』は、「桐火桶」に象徴される、或る微妙な神秘ですらある境地が表現行為をめぐって存在する、という信念(あるいは幻想)が想像力の母胎となって生み出されたテキストであるが、上記の言説はそうした境地をより一層具体的に限定化・秘説化・含意化しようとする意図や指向——我々の側からは、言説の文節化、秘説の自己純化とみえるもの——を示すものに他なるまい。「号

志気」では、それがテキスト冒頭でいち早く姿を見せている。注意されるのは、この現れが単に当該箇所にも局所的に見られるのではなく、「号志気」のテキスト全体の骨格や論理にもかかわっていることである。すなわち当該の文言は「号志気」の巻頭における叙述と連係している。

『桐火桶』冒頭の一文の後には、諸系統・諸伝本間に出入りはあるものの、おおむね——錯雑した異同の点検作業を進めている吉原克幸がすでに示しているように——次の文言が続いている。

をよそ當道の大事は大略鶉の本末に申侍りぬ、又唯傳一子の秘曲もおなしくかの巻にところ／＼書おさめ侍りぬ、但しかやうに申侍とも又大事とも也

ところが右の「但し」以下に相当する一文は、「号志気」では、但かやうには申侍れとも又大切の事とも侍也、大事の鳥歌力といへる事、又秘歌といへる事させるやう様はなけれとも、いとたやすからぬなり「大事の(歌)」以下は他本不見の、まさに「号志気」の独自異文である。「秘歌」と並べて説く、この箇所の論理が先述の「裏書」冒頭のそれと照応していることは明瞭であろう。その上、本テキスト最末の直後に見える先掲奥書の「右唯傳一子」云々とも仮に連動していたのだとすれば、「裏書」の趣意はまさしく首尾一貫したものとも見なすことができるだろう。テキストはそのように叙述され、配置されている。ここで印象づけられているのは、或る種の歌は特有の意味と価値そして奥義を担っているという論点であり、この論点は「裏書」の歌註において、書き手であるプソイド・定家によってさらに展開されることになる。

(5) 掲出歌

(4)で引いた文言ののちに八十六首の歌と註が記されている。それらは主として新古今時代の歌人たちの歌である。事実、新古今入集歌を多く含み、勅撰集で言えば古今集から新勅撰集に及ぶ⁽²⁶⁾。「定家」による採歌という設定であるから、右の範囲も了解されよう。ただし勅撰集のみを基に選出しているのではなく、私家集からも採られている。これらの歌々の並びは必ずしも緊密でなく、たとえば和歌史的な意識のもとに時代の様式に関心が向けられているようには見えない。また歌人名を示しておらず、「裏書」に続く一連の歌々において、歌人名をまず挙げて個々の詠風を例の譬喩を用いて列記しているのと対照的である。すなわち個人様式に対する関心が主軸になっているのでもなく、筆者の目指すのは歌人ではなくむしろ歌であり、各歌の含みもつ或る深甚な意味を説き明かすところに意図はあったのだと考えられる。なお最末の八首は、遍昭から黒主までの六歌仙の歌を、古今集序の六歌仙評を簡略化したかのような註文とともに掲げたもので、前段までの叙述とは遊離しており(書写形式も小異ある)やや粗雑というのに近い内容である。あえて六歌仙を並べたのは、本書巻末で古今集にかかわる一連の秘説について記すことと無縁でなかったかも知れない。

さて注目されるのは、いくつかの歌に「秘歌」とする肩註が施されていることである。「秘歌」の肩註は先引の家隆詠「あらしふく」にすでに見えたところであったが、「裏書」ではさらに八首に施されている。

この肩註は他系統本には存在しない。つまり「号志気」系の筆者は「あらしふく」を「秘歌」と認知するとともに、増補の筆を揮った「裏書」においてもさらに掲出歌の一部を特に「秘歌」と指定して、それぞれに釈義を加えたのである。「裏書」に先行する右の家隆詠を含め「秘歌」と註記された都合九首(伝本により出入りがある)を一覧すると次のとおりである(初句を掲げる。括弧中の数字は「裏書」掲出歌の通し番号)。

- | | | |
|--------|-------|-----------------------------|
| a | あらしふく | 家隆 壬二集・二五九八(新編国歌大観本「うづもるる」) |
| b (9) | 思ふ事 | 慈円 新古今集・秋下・一七八二 |
| c (10) | 人すまぬ | 良経 新古今集・雑中・一六〇一 |
| d (14) | 浅茅生や | 通光 新古今集・雑上・一五六四 |
| e (18) | 昨日たに | 家隆 新古今集・秋上・二八九 |
| f (47) | 月やあらぬ | 業平 古今集・恋五・七四七 |
| g (48) | 年もへぬ | 定家 新古今集・恋二・一一四二 |
| h (49) | 筑波やま | 家隆 壬二集・六五五 |
| i (53) | 侘ぬれは | 元良親王 後撰集・恋五・九六〇(拾遺集・恋二・七六六) |

家隆歌の重なりは注意される。そもそも『桐火桶』の中では家隆に特別の位置が与えられているように見える⁽²⁷⁾。それはaの後に加えられた説の増殖ぶりにすでに窺えるところであったが、「裏書」ではその方向が一層助長されることになる。これらの「秘歌」を手掛かりとして歌註に見られる指向の一端を抽出してみよう。

(6) 歌註

「裏書」冒頭の所説によれば——それは「俊成」の語るところとされるのであるが——「秘歌」とは「唯傳一子の類」の謂であった。では、直系の一子だけに密かに伝えられるべき歌とは、どのような歌をいうのか。上記の「秘歌」とされる歌の歌註の中から、特に目ぼしい言説を拾ってみよう。

a 先引のごとくであるが、当該の家隆歌を示した定家に対して、俊成は「数返高吟」、「此歌こそ秘歌とも申へけれ」とし、「桐火桶」の歌の域にまで「志気」が到達している歌だと語ったのだという。感嘆の様を「高吟」によって表すのはひとつの類型であり、後述のc・dでも繰り返され、「秘歌」以外にも「吟し給へり」(30)と見える。「桐火桶」に言及して説くことの重要性は再三指摘したとおりである。

b 漢詩句をしきりに援用するのも大きな特徴である。ここには「是は、三五夜中新月色、二千里外故人心、此詩にあはせ侍り」とある。また「亡父卿も不断煩惱向入涅槃と云文に吟しあはせよと宣き」のごとく法文にこと寄せて解すべきことも云われる。「家集裏書二云」とする引用が見られる(当該歌は『拾玉集』四・四八三七)。家集を参照するのは、「彼家集を見るに」(1式子歌)「萱齋院の家集を見るに」(11)、「家隆か家集を見るに」(49)にもあるものの、当例にいう「家集裏書」の「裏書」は実体不明であり、深秘を語るためのレトリックに近いものですらある(11も同工)。「裏書」の歌註の中にさらに「裏書」の説を設けて、いわば入れ籠状に説の増殖が図られてゆくのである。

c 当該の良経歌は一連の掲出歌の中で最も称賛されている歌のひとつで、至高の水準を示すものとされているおもむきすらある。次のdに、「不破の関屋の程にこそとて、また疇昔のごとく打咲たまふて云給はず」とある「俊成」の発言とそれに続く表情の描写はそれをよく伝えている。良経歌について歌註には、「是能堺に入たる歌なりとて、うちわらひ給へり、扱いかにと問奉れば、気色あしけにて、江樹風生波禦岩、渡林花落雪盈科(斜)、此詩をかたりしに高吟して、しやく拍子うちて、たからかに、ほのく／＼とあかしの浦のと詠し給へり」とある。「定家」が云い出した詩句を、当該歌の表現意図をよく云い当てたものとして「俊成」は嘉したのであろう。ところで詩句を「高吟」することは、たとえば『愚秘抄』の「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中、此詩をぞ先人常に高吟せられし」などにも見られた。しかしそれは「常によき詩を心にかけて詠吟せよ。心をたかくすます事詩にすぎたる事なし」という文脈で、創作態度の心得として語られていた。一方ここでの詩句は歌の観賞の媒介として、しかも「高吟」することが歌を味わう際の身振りや仕草に類したものとしてすら語られており、両者は次元を異にしている。ただし詩句への言及にはもうひとつ、歌の解釈の媒介として語られる場合もある。「…と云る詩にてみるへし」「能吟あはせて味をなめて水と氷のごとくにせよ」(28)、「此詩をあはせて読侍れは」(71)などはその種の例である。 「しやく拍子うちて」云々の部分は、「裏書」の後の歌人評のうち、俊頼評に見える「あふき拍子を一つ二つうちすさみて、たかくからぬほとに歌うち吟したるおもかけ」などの類推が働いているかも知れない。

「ほの／＼とあかしの浦の」は言うまでもなく、中世、不可説微妙な理想的な境地を体現した歌としてしばしば引用される人麻呂歌を指している。その歌を「詠し」嘯くことで、当該の良経歌の深い興趣を示唆しようとするのであろう。

経の法文を用いて説明する（その原文の引用は省略）という側面がここにもよく現れている。歌註の末尾は「唯傳一子と申なから子により侍へし」で閉じられている。「唯傳一子」の歌ではあるが、たとえ子といえども誰でもよいのではなく、伝えるのは器量を備えた者に限ると云う。当歌は「秘歌」の最たるものであることが強調されているのである。

d 「おそろしき巧なるうたよとて高吟常ならずと云々」の言で結ばれる。高い評価を与えることを意味する「高吟」が常套的な表現として反復されている。「褒美常ならず」（42）という称賛の、身振りを伴った表現ということになる。

e 当該の註は次のごとく短い。

是はさせるふしはなけれども又一ふしに、生田のもりは西也、西は秋なれば也、又はく、いくはくの田面に秋はと云り。

「させるふし」はないと評しながらもこれを「秘歌」と位置づける理由は、云われているとおり、生田―西―秋という繋がりや、生田―幾田の掛詞そのものにある。我々の目には奇異にも映るが、ここには生田という地名―西方―秋という結びつきに深甚な暗喩的な意味を（修辭とも連係させて）読み取る、中世の認識が介在していると考えべきだろう。

方角・方位と修辭との関係を説くという論点（あるいは思弁）はcにも

見られる。

f 業平の「月やあらぬ」の慨嘆を積して「皆世中のならはしには悲佐侍りて」という諦観が語られ、果てに「此歌業平法文也」とまで云われる。「秘歌」は仏教的思念の深く籠もる歌でもある。

g 「定家」みずから自歌を「秘歌」と認める例。評価の主軸になっているのは前例同様、一首を貫く仏教的な思念である。「世上の常」を思い、ひたすら「はつせの観音を頼む計也」と「祈念」するところに、この歌の主意を読み取るうとする。解釈する主体の思念は作中主体の心情と重なり合う。

h 先掲bにも記した「家隆か家集を見るに」が目を引く。そのあとに若干の釈義を加えるものの、家集の記載自体を引用する訳ではない。むしろ家集を参照し、書かれたテキストに立ち戻るといふ行為を語ることそのことに深い意味を含めるのであろう。「秘歌」を認定する意識とテキスト意識とがどのようにかかわっているかを考えさせられる例である。

i 漢詩句「槐花雨潤新秋地、桐葉風涼欲夜天」を引き、詩句に沿って歌意を説く。重要なのは、当該歌ならびに右に引用された詩句が『三五記』の歌体論に掲示されたもの（「幽玄体」と符合しているという点である。『三五記』との対応はこれのみに止まらない。「秘歌」のbは『三五記』「長高体」に、cは同じく「一興体」にそれぞれ詩句とともに掲げられている。さらに「秘歌」以外にも少なからぬ歌とその歌註において『三五記』歌体論と符合する例を確認できる。実はこの符合は筆者自身の意図したものであった。iでは「三五記」の名そのものを挙げて歌

・詩句の繋がりや意義について説いているのである。すなわち、「詩歌合と云るも世にゆゝしき大事なり」と強調——「詩歌合」は歌合の一形式を指しているのではなく、歌と詩句とを読み合わせて読解するという当歌註における論点を云うのであろう——した上で、次のように説く。

此のほんく、あそこ爰に三五記の詩歌書入侍は、雪上の霜とやらんなれば、学ふへき道をさたし、ことに書とゝめ彼此みる次に見侍らば、けには胸中の道具ならさらめや（校異参照）

以上の事実は、『三五記』を下敷にして歌註は書かれているという書誌的な事情を証するものに他なるまい。注意されるのは、テキストに依拠する際に、詩・歌の参照という、解釈ならびに註釈をめぐる筆者の論点が強くと働いていることである。

「秘歌」とされた歌の註の要点をあらまし以上のように辿ることができると思う。秘すること、そして密やかな意味を語るための様々な論点や論理が用いられており、それらが「秘歌」については特に強調されているのである。ただし所どころで言及したとおり、これらの諸点は「秘歌」ばかりでなく広く歌註全体に行き渡っていると見てよい。あらためて歌註の論点・論理を、説述の方法という観点から捉え直し、まとめてみよう。

最初に、仏教的な認識論に基づく論法が色濃く現れていることを挙げらるべきだろう。「本覚」(7)「華嚴経」(34)「舍利」(35)を語り、

文・法文を引き、「**力**字不可得の理」(61)を説く。一方、二神和合を積する際(75)のごとく神道説が用いられることも見逃せない。より一層叙述の方法に近寄って言えば、一つは引用・参照という形式が幾度も繰り返されることを挙げたい。その元にあるのは「あはせ」ることの重視である。詩句であれ法文であれテキストを相互に照らし合わせることで、よって歌の深意を、媒介を借りて統合しつつ説明しようとする。しかも「世にゆゝしき大事なり」とあったように、この手法を筆者みずから自覚的に実践していたと考えられる。第二に、頻りに見える「たとへ」という論述の方法がある。後続の歌人評に云う暗喩的な叙述の「ならへ(なすらへ・なそらへ)」とは別で、「たとへは」「縦は」として歌意の敷衍が図られる。それが歌の鑑賞・解釈の方向を先へと伸延させる言わば力となる働きをしているのである。第三に、語りの場の設定を指摘すべきだろう。「裏書」の叙述は惣じて「俊成」と「定家」による(家隆が登場することも)語りの場となっている。語り、申し、宣う俊成の言談を、聴聞する定家は、時には発語せぬ父の表情・仕草から直接には表現されない意向と真意を推し量りながら、敬すべき人の尊言として書き止めるのである。しかも「いつも申事に侍れとも」(73)と云われるように、この語りの場合は、常づね父子の間で共有されていたことが暗黙の内にいわれてもいる。もっとも父子相承の中で語られる談話は「いつも申ごとく歌の本には古今第一なり」などに現れているとおり、「桐火桶」というテキストの重要な側面のひとつでもあるが、「号志気」においては「裏書」という形式そのものを語りの場として、その枠組のもとで掲

出歌の鑑賞と解釈をめぐる父子の応酬を録することによって、多彩な言説を生み出しているのである。当の語りの場を設定し、言談を縦横に書き留めているのはプソイドー定家である。

三 「裏書」の位相

その「裏書」を書き付けている主体とその主体性に関連して、あるいはテキストを執筆している筆者の意識について付言したい。上述のように「裏書」の歌註では確かに自在な語りが記されているが、その叙述は時に次のような、一種の規制とも取れる筆の淀みをも招く。

此歌は古今の中の肝心也、読人を可秘、札の裏書に名有、忝も天照大神と見え奉、時人に託宣して宣、此国を異国より亡ほさん事のかなしきに、住之此国を守覧と思ふ也と云、下日本ヲ伏見と云事、二神の嫁を見書たりし故也、此御歌を此書の肝心に書入奉るへきよし思ひ侍れとも、餘おそろしくて也、然とも爰テ思惟叶はず、偏に冥慮ニ申承りぬ(76)

「いざここに我が世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」(古今集・雑下・九八一)に対する註の全文である。註の後半の趣意はおおよそ、前歌(75)で二神の神婚・和合の説を書き著した今、当該歌についても、当書の眼目とも考えて註を書き込もうと思うのだが、余りに恐れ多くて果たせないでいる、かと言って当面、熟考することも及ばないまま、神明の御意向のままに了解しておきたいというもので、思考を停止して、客観的な論理や理性を超越したものにすべてを委ねている、とも

見られるであろう。自在に進展していたはずの筆鋒は鈍り、停顿するかのごとくである。歌註では、右にもいみじくも「此書」に「書入」とあるように、「書く」ことが意識化されており、註はまさしくテキストとして書かれているのであるが、この条りには強い心的な荷重や抑圧が筆者の「書く」ことに働いている。ここにある一種の規制の内質を問うことが「裏書」のテキストとしての性格や位置を見定めることになるのだと考えられる。

筆者の筆を左右しているのは神明の威力であるが、問題はその底流や深層である。右の歌註の前半の基盤にあるのは、古今集註釈史が累積してきた、当面の例に見られるような神秘をも含み持った言説である。たとえば「古今集抄」(平松抄)の当該歌註に、

すかはらの伏見とは、やまとにあり、此歌當集肝心の歌也、題もあり作をもあれとも、不知と入るゝ事秘事也、わざとかく入る事口傳なり、面は以仁徳治世心を顕たり、延喜の御心にてこゝに入らるゝと也、口傳の歌之中也⁽²⁸⁾

とあるように、おおよそ室町期には、当該歌が集中の「肝心」ともなる位置を占めていることや、作者の問題に「秘事」のあることなどが註釈史の話題の種としてすでに定着していた。「裏書」はそうした基盤に根差していたはずである。特に重要なのは先の歌註に見える「札の裏書」である。これは中世の古今集秘伝書『玉伝深秘卷』の当歌にかかわる「金札伝」に云う、次のごとき釈義と密接に結びついていたはずである。曼殊院本によって参照しよう。⁽²⁹⁾

此歌ハ古今一部の中の灌頂の歌也、桓武天皇山城國菅原伏見里二宮作して住給しニ、天より化人来て常ニすめり、あやしみて宣旨下し給ふニ、天より金札ふりけるに此歌をかゝれたり、裏ニ作者の名字あり、天照太神とそありける、其故託宣あり、伏見と云々、日本名也、如何となれハ、二神天浮橋ニして會合なり、此國出生せし間、伏見と云り、然ニ我此國を守り、あらさしと云るなるへし、御門此内裏ニ社を造、太神宮を祝奉り給ひけり、今伏見御札宮と云ハ是也、此金札、此社ニ籠られたり

この「金札」の伝は、名乗ること、名を記すことにまつわる幻想を伝えて興味深い。その本文は幾分かの異同を生みながら、伝受切紙「金札口伝」として別途に流伝しているが、⁽³⁰⁾「裏書」の説は「裏ニ作者の名字あり」という点に特有の意味を籠める『玉伝深秘卷』と親近するもので、むしろ同書自体を直接撰取しているかとすら推測される。

先述のように、「裏書」の記載を参照するという論法は、筆者にとつて歌註の説述を紡ぎ出すための重要な糸口であり、時には「裏書」の内にさらに「裏書」を布置して、入れ籠状に説の増殖を進めるための装置でもあった。その入れ籠の内側に、もうひとつ「札の裏書」に記されたテキストが密かに組み入れられていたのである。表に立ち現れる〈顕在するテキスト〉の裏に、表に添うようにして裏のテキスト、〈暗在するテキスト〉が潜んでいる。そのような中世の（中世における）テキストの影を、当該の「裏書」もまた色濃く宿しているのである。

四 書誌的な見渡し

では、「裏書」を重要な柱としている「号志気」というテキストの、歴史的位置はどのように把握されるべきだろうか。心覚えとして簡略に見渡しておきたい。

「号志気」の流伝を告げるのは諸本の奥書であるが、現存伝本の奥書のうち近代に及ぶ享受の痕跡をも保存している慶応大学本のそれを除くと、最も注目されるのは九州大学本に見える永享四年（一四三二）の正徹の奥書である。嘉禎の奥書の後に、次のようにある。

此本者自四條女房以来傳之、相授之系圖在之
永享四年八月十五日 千松末葉 正徹在判

この後さらに、当本の数奇な由来を語る長文の識語が続いている。同識語に年紀の無いまま九州大学本は終わっているが、早く平泉澄は、これと同じ流れに立つと思われる伝本を「桐火桶廣本」と呼び、当該識語の後に、明応七年（一四九八）、文亀元年（一五〇一）、永正元年（一五〇四）の年紀を持って続く一連の奥書と併せて紹介している。⁽³¹⁾平泉の指摘するとおり、当本の伝来はなお検討されるべきであり、「此等の奥書は後世の偽作とすべく余りに中世の特質を具えてゐる」という言い方も可能かも知れない。右に云う「相授之系圖」は伝本に痕跡なく実体不明であり、正徹奥書の仲秋望の日付も疑えば疑える。また長文の識語で「我」と記す人物を、明応七年奥書の記主とは区別してそれとの間に想定すべきかも知れない。しかし記されている奥書をすべて斥けるのは当たらない。

いだろう。ここでは正徹の奥書そのものを信ずるといふ立場に立っておきたい。正徹の見た『桐火桶』が諸系統のうち一つのみに限られていたか否か——『正徹物語』記すところの、「桐火桶」にうちかかって案ずる俊成の像は、唯一のテキストのみをとおして得られたものかどうか——は断定できないにしても、正徹は「号志氣」系のテキストを確かに披閲していたのだと推定される。したがって「裏書」を含む「号志氣」系テキストの成立は正徹以前、年次を言えば永享四年を下限とするひとまず考えられるだろう。

正徹は、「裏書」が踏まえている『三五記』を直接享受していた。それは伝正徹筆の存在する天理図書館本を紹介しつつ田中裕の検証したところである。正徹はまた、同じく「裏書」の依拠していたと推測される先述の『玉伝深秘卷』のような書にも接していた⁽³⁴⁾。それらの資料の載せるところを、「号志氣」の「裏書」の論述と照らし合わせて読むという回路が、正徹の内に一度は存在したのだと思われる。では「桐火桶号志氣」の成立は、ひとつの目安である永享四年を溯る、いつの時点であるかは、ここで検討した「裏書」を『桐火桶』諸系統の動態と照らし合わせることによってさらに吟味されることになる。

おわりに —— 課題のために

「裏書」の（本文異同を組入れてなされるべき）細読は今後の課題である。それとともに広く本系統についてみても明らかにすべきことが少なくない。たとえば「桐火桶号志氣」の名義についてはいくぶんかの推

論を試みたものの、なお検討の余地がある。 「志氣」「号志氣」「桐火桶号志氣」の語義・概念、それらの歌論用語としての用例史を探索することも求められる。とりわけ注意されるのは「志氣」である。つづめて言えば「志氣」は中世歌論の核心にかかわるテーマである〈心〉と〈主体〉の問題と深く結びつき、かつそれらの問題史的展開に働いた契機を考える際の重要な概念となるだろう。

ここに見る「志氣」は、たとえば近世後期、香川景樹によって、真淵の実朝評価に対して、

また鎌倉の右府の歌は、志氣^{コ、ロザン}ある人^{クエ}決て見るべきものにあらず。況や是に倣ふべけんや。（『新学異見』）

と語られた中にある「志氣」^{コ、ロザン}とはすでに別であり、下って、「悲憤^{悲憤}振氣^{慷慨}編」（慶応戊辰＝明治元年（一八六八）序⁽³⁵⁾）などが編せられる近代の形成期以降の雰囲気をお残して、修辭的な身振りも大きく語られる「意氣浄潔」「志氣稜々」などの語句（『和漢文学美文断片』後編 人事之部・「志氣」）に見る「志氣」ともはや異なっている。

言うまでもなく中世の「志氣」は中世の文脈の中で読まれるべきであるが、仮に「志氣」を本稿の読みの方向で解し得るとして、この概念が歌論用語の中に導入（あるいは移入か）されたことの意義を当の時代の文脈の中で、この系統のテキストの成立時期や事情の問題とかわらせながら検討することも、今後の課題である。

「志氣」の問題ばかりでなく、取り上げた「裏書」の歌註の中では「魂」が説かれていることも印象的である。これは和歌における心的な世界が

著者、プソイド・定家によって多層的な次元のもとで捉えられていたことを予測させるであろう。〈心〉と並んで〈主体〉の問題圏においても、歌註の中に、俊成の語りや俊成・定家の父子相互の問答・対話を、一面では混態化をも来たしながら多様に設定することを通じて、詠作する主体、鑑賞する主体、解釈する主体、そしてテキストを物する主体などの諸次元を、著者は暗黙のうちに意識化していた——ただし、それらの境界は多分に入り組んでいたはずである——ことになるだろう。

そのような内実を包みこんで『桐火桶』が増補されてゆく様態、言い換えれば、テキストの生成する過程に我々は触れていることになる。取り上げた「裏書」は、或る観念や思弁に促されて歌の解釈が増殖されてゆく様を特によく伝えているが、同時にそれは偽書生成の力が働く様に他なるまい。『桐火桶』の一系統の内にすでにそうした力が渦巻いている。その力を掬い上げて、その力が定家擬(偽)託の諸テキストの生成と、動態を孕みながらどのように連繋していたかをこそ追究すべきであることは、既述したとおりである。

《註》

- (1) 川平ひとし『桐火桶抄』の位置—定家享受史の一分について—『中世文学』40 一九九五・六。
- (2) 佐藤恒雄「解説」徳川黎明会叢書・和歌篇四『桐火桶 詠歌一鉢 綺語抄』(一九八九 思文閣出版)所収。
- (3) 同大系解題参照。
- (4) 田中裕「桐火桶摸索」(『語文』29 一九七一・五)同『後鳥羽院と定

家研究』(一九九五 和泉書院)所収。

- (5) 佐藤恒雄、(2)。
- (6) 吉原克幸『桐火桶』私注(一)〜(四)、『自讃歌注研究会会誌』創刊号 一九九三・一、(二)同2、(三)同3、(四)同4 一九九六・九。
- (7) 財団法人冷泉家時雨亭叢書編『中世歌学集 書目集』冷泉家時雨亭叢書・第四〇巻(一九九五 朝日新聞社)解題(島津忠夫)参照。
- (8) たとえば堀辰雄の母の名が「志気(しげ)」であったことく。
- (9) 岩波文庫本『太極図説・通書・西銘・正蒙』(一九三八 岩波書店)。
- (10) 岩波文庫本『孟子(上)』(一九六八 岩波書店)による。
- (11) 田中裕氏の示教による。
- (12) 加藤宗厚編『正法眼蔵要語索引』(一九六二 理想社)によって一覽し得る(一二例)。
- (13) 日本古典文学全集『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』(一九七二 小学館)の本文による。同書の、この語に対する頭註に「事をなそうとするころざし・気力・意気こみ」とある(安良岡康作校注)。
- (14) 両書とも岩波文庫『道元禪師語録』(大久保道舟訳註 一九四〇 岩波書店)所収本の訓読文による。
- (15) なお梅屋和尚文集(続群書類従、卷三四九)に次の例を見る。
菊其族而同阿太中郎。称江左之人物。藤其姓而為無相居子。入日東之詩章。
抱志氣者恢弘 吞八荒囊四海 治城郭於險地 帶五湖襟三江
- (16) たとえば神道論の領域など。
- (17) もとより定家に仮託された語りの中にある俊成の言。ここを捉えて『桐火桶抄』は事実関係の齟齬を指摘しつつ「感歎返ノ不審」と記す。川平ひとし『桐火桶抄』の本文『跡見学園女子大学国文学科報』23 一九九五・三)参照。

- (18) 「建保四年内裏御会に 寒山月」につづく歌。新編国歌大観本の初句は「うづもるる」。
- (19) 宝暦一三年(一七六三)刊本による。初刊は同七年。
- (20) ただしこの「秘抄」は固有の書名を指すのでなく普通名詞として用いられている例か。重要なのは、右のような記載を持つ同書の多くの伝本は「桐火桶抄」という標目のもとにある点である。仮にこの標目が、ひとまず頓阿著と推定される同書の成立時に既に冠されていたとするなら、頓阿らは「秘抄」と意味づけられた書を「桐火桶」の名とともに享受していたことになる。一方「桐火桶抄」の標目は「井蛙抄」「水蛙眼目」の享受される中、後人によって付された(その場合は、東常縁の所為であった可能性が高い)とも見なし得る。これらの次第については、川平(17)参照。
- (21) 佐藤(2)、島津(7)、ならびに川平(17)参照。
- (22) 妙暁上人と法談の折の所懐と喜びを記し、「禪門之一宗」を称えた中にあり。
- (23) 見方によれば、神秘化 (mythification)・詭弁化 (sophistication) と呼ばれよう。
- (24) 狩野文庫は、外題(題簽)に「桐火桶号志記 全」とある。内題は他本と変わらないが、外題に「記」の表記を持っている点は注意される。内題の「号志気」に不審を覚えてあえて「気」を避けたのだろうか。暗黙のうちには本書を髓脳・口伝の書物と認める意識が働いて「記」の表記を促したのでろうか。なお本書の後に『源語秘訣』(群書類従 卷三一九所収)を合写。同所の奥書に「唯傳一子之秘説」などの字句あり。ともに秘説の書であると捉えるゆえの合写であったか。
- (25) 以下系統等の断りなく『桐火桶』として掲げる本文は、流布本的な位置に立つ群書類従本(板本)のそれによる。
- (26) 各歌の配列・構成をさらに検証すべきであるが、いまは省略に従う。たとえば「裏書」の例歌一首目に式子歌を掲げるが、歌は後段の歌人評で

引く三首とは重ならず(他に重なる例あり)、まさに別途の例をもってする敷衍となっている。「裏書」を増補されたものと捉えれば、掲出歌にも筆者の編集意図を読むことができる。なお、一首目の式子歌は「桐のはも」。まず「桐」を置くことにも意図があっただろうか。「桐」のモチーフは53の歌註にもかかわる。問題は少なくとも少ないと思う。

(27) 77(壬二集・一八六 正治後度百首・雑)では、「家隆卿の云」として作者に自詠を語らせている。

(28) 『古今集抄 京都大学蔵』京都大学国語国文資料叢書十九(一九八〇 臨川書店)。同解題(新井栄蔵)参照。

(29) 『曼殊院蔵 古今伝授資料』第二卷(一九九一 汲古書院)所収。

(30) 川平「冷泉為和相伝の切紙ならびに古今和歌集藤沢相伝について」(『跡見学園女子大学紀要』24 一九九一・三)参照。

(31) 平泉澄『中世における精神生活』(一九二六 至文堂)参照。なお合わせて稲田利徳『正徹の研究』(一九七八 笠間書院)一〇四頁参照。

(32) 平泉、同上。ただし当の「中世の特質」とは何かこそ問うべき課題である。

(33) 田中裕『中世文学論研究』(一九六九 塙書房)参照。

(34) (30)の解題(浅見緑)、ならびに同掲出の参考文献を参照。

(35) 関貢米編、一八九八年・増子屋書店刊。

〔謝辞〕 翻刻掲載を許可された東北大学附属図書館に対して

厚く御礼申し上げます。

〔付録〕

『桐火桶号志気』『裏書』の本文ならびに校異

小稿で検討した「裏書」部分のみを『桐火桶号志気』の本文から切り出して以下に翻刻し、同系統の伝本との異同を脚註の形で示す。もって今後の細読の料に供したい。

翻刻にあたっては、字体をおおむね通行のそれに改めたが、異体字や漢字（い

わゆる旧字体が用いられている場合）の一部を元のままとした。ただし底本の書写形式の原態を復元しようような翻刻を目指していない。たとえば被註歌の上下句改行二行書きを、上下句間を一字空けて一行に追い込み、適宜読点を付

裏書に云、桐火桶の類とは六十以後のうた也、又或時宣き、秘歌と申は大事の歌と申事少は異同有へし、秘歌と申は唯傳一子の類、大事の歌と申は沈吟して出来ぬる類なるへし

1 桐のはも踏分かつく成にけり 必人を待となけれと

比歌は庭上落葉を題す、此題を深秘す、たとへは閑庭の落葉はふかく積れり、必と人の問侍へ

「秘歌」(九)
 此題を深秘す―ナシ(九) 必―秘(内) 問侍へきには―問侍るへきに(九)

きにはあらねとも、洒掃をくはへ侍き歟、只秋の感をふかくいへるなるへし、けにも彼家集を見るに庭上落葉を題して秋の部に入也

2 やま桜咲そめしより久かたの 雲井にみゆるたきの白糸

此歌は、青兼峨々山肩律卒、流水冷々如雲如雪、と云る詩をあはせはへり、たとへは、青々吾

流水―滝水(九) はへり―たり(九)

巖瘦肩異ナラス此中より落ル滝水冷々タル氣色、誠雲雪のことしと作れり、此歌は、此間は青葉の中より落る白滝なれば、ほとらひ見え侍らさりしか、花開ぬれば、はなもたきもおなし白妙に見えて雲居より落ると云り、詩歌能吟合侍り

中より―うちより(九) 開ぬれば―開ぬれ(内)

3 吾恋は松を時雨の染かねて 真葛か原に風さはく也

此歌は松を時雨の染かねて真葛か原にかせのなと云る、恋の心にとれば、たとへは松を染かね

「慈円」(九)

した。掲出歌八十六首に、通し番号を付した。校異は、表記の相違を無視し異文のある場合のみ掲げた。傍訓、訓読に伴う「の」、返り点等の異同は省いた。底本は先掲の東北大学附属図書館蔵狩野文庫本。校合本の標示は次の略号による。

内 内閣文庫蔵本

慶 慶応義塾大学図書館蔵本

九 九州大学附属中央図書館蔵本

の類―の歌類(九) 申は―申(九)

たるかことし、終に叶はぬは吾まくる慣也、しかはあれと染かねてまけるとつゝけ侍り、同此類のうた

家隆卿か野風を題にて

4 けふみれは幾度生田の小野の真葛原 うらかれ渡る秋かせそふく

是も野辺の氣色昨日よりけふはかれまざるを、秋風にまけるとつゝけたり、亡父卿云、吾恋の歌、松は待也、云心はあまりに待兼、袖の時雨つもる恨は葛也、胸中にさはくと也

5 大よとの月に恨てかへる波 松はつらくもあらし吹夜に

此歌はあまりにくまもなき月の夜なれば、思ひあくかれて尋行侍れば、出もあはすなりぬむなしく帰也、是程に侍らは唯待てあかし侍らん物をと、中々月に恨て帰涙よりは待はつらくもあらしと申侍也、此次に自も申侍れと有しかは、申けるまゝ筆のすきみに書留侍り

6 思ひ出よ誰かねことの末ならん きのふの雲のあとのやまかせ

是はかねくみしことも君もおもひ出よ、たか兼言のすゑなれば昨日のかせに隨る雲のごとくあともなき心そと云也

7 蓮葉の濁にそまぬこゝろもて なにかは露を玉とあさむく

是は古今の名歌なれば世に沙汰有き、然間此ほうくの骨髓に書入侍ぬ、たとへは蓮は泥中にあれとも泥に染す、生死を泥にたとへたり、本覚を蓮にたとへ、本覚は自性清浄にて生死の泥に染さる事、蓮の泥に染さるかことし、あさむくはあさけるなり

8 月夜よし夜よしと人に告やはら くてふににたりまたすしもあらず

此心は今宵の月の面白さは限も覚えず、あはれ此由を人つけやは早くこよと云に似たるへきほとに待すしもあるへきと也

9 思ふ事なと問人のなかるらん あふけは空に月そさやけき

秘歌

ことしこごとく(九) 叶はぬはかなはねは(九) 吾我
か(九) しかはあれとしかれと(九)

家隆卿か家隆卿の(九)

「有家」(九) 吹夜にふくなり(内)

申けるまゝ申せしまゝ(九) すきみにすきみ(内) 書

留侍りナシ(九)

「家隆」(九)

是は是はたゝ(九) みしこともみし事を(九)

「遍昭」(九)

たとへたとふ(九)

「業平」(九)

人一人に(慶・九)

秘歌ナシ(内・九)

「慈円」(九)

是は、三五夜中新月色、二千里外故人心、此詩にあはせ侍り、詩は八月十五夜、此宵の新月の色余に面白く侍れば、自をも他をも忘侍ぬ、人の問こぬもさもと推はかりぬ、二千里外心を知也、さてこそ亡父卿も不断煩惱向入涅槃と云文に吟しあはせよと宣き、けにもおもふに終に問ぬ思をさやけき月のひかりに打忘ぬる心をさして煩惱を断せすして涅槃入と心得たり、家集裏書二云、此歌は思事有てよめれば態其部には入す只雑に書入侍ぬ

10 人すまぬ不破の閨屋の板庇 あれにし後は只秋のかせ

此歌を語申ければ、只の字のうかひ出たる事不思議也、是能堺に入たる歌なりとてうちわらひ

給へり、扱いかにと問奉れば、其気色あしけにて、江柳風生波禦岩、渡林花落雪盈科、此詩を

かたりしに高吟してしやく拍子うちてたからかに、ほのくとかあしの浦のと吟し給へり、近

比心得もいらぬ境也、又此歌は関路秋風を題す、かりにとまりて終に語をも留め侍らねは関路

秋風を理る也、縦は人すまぬは人の魂魄也、すまぬはからた也、不破は心也、如此からたなれ

とも心と云物は終にやふれす、板庇は皮肉なり、あれにし後は四方八方只あきとをりて天地同

根、万物一躰なり、只の字を見るに、口八是也、口は四方也、東門西、八、八方也、かゝる故に

此只の字、玄妙不可得羅上下、虚空可思量法界、是此境界也、此歌をおもは、先此文の見へ

し、佛の身は光濁 於法界一普現一切群生前、今此文の心は、仏身は法界にみちたり、普一切

群生前に顕たると也、猶もあれにし後は四方八方あきとをりて法界に充滿せりと、此歌近比目

出度歌也、唯傳一子と申なから子により侍へし

11 詠侘ぬ秋より外のやともかな 野にもやまにも月やすむらん

是は秋の感也、式子内親王ノコト也、萱齋院の家集を見るに、花下横琴調夜月、船中載酒酌春波と云詩を

書添たり、思惟し侍れはけにさる事也、花下琴携夜月調は、吾身はあらぬ境なるへし、春秋の

外もかなと云るなるへし、縦は思とち相交之花下月前にかたらん折節は感に堪只今の外もか

故人一胡人(内) 心一情(九) 十五夜一十五夜也(慶・九)

向一而(九) 問ぬ一向ぬ(内)

此歌一此事(九)

秘歌一ナシ(九) 「月輪殿御子 後京極良経公」(九)

入たる一入たり(慶)

岩一岸(九) エタニ一ナ、メニ(慶)

かたりしに一かたふしに(九) うちて一て(内)

「題す…秋風を」一脱(九)

皮肉なり一彼遍也(九)

肉也イ

此文の一此文を(慶・九)

身は一身に(九) 光濁一充滿(慶)

顕たる一顕たり(慶) あらはれたり(九)

「式子内親王」(九)

さる事也一さる事侍也(九)

交之一交々(慶) ましはりて(九) かたらん一かたらはん(九)

折節は一折節(九)

など云へし、面白き心をのかれ問合にや、けにも船中の事酒を呑、花の下に琴なとこまやかに
かきとちめたり

12 見わたせは花も紅葉もなかりけり 浦のとまやの秋のゆふくれ

此歌は月を題せり、物の面白事は花紅葉月也、笠屋の夕くれの氣色、言語慮絶の堺也、見渡は
花もなし丹葉も見えず、笥の月の佛不可得ま、笠屋の秋の面白は花丹葉も及ぬやうに聞えて、
しかもさにてはなき所を見へし

13 心なき身にもあはれはしられけり しきたつ沢の秋の夕くれ

此歌は西行法師、卒都波マデのたてるをみてよめり

14 秘歌 浅茅生や袖に朽にし秋のしも 忘れぬ夢を吹間イあらしかな

是なむ寄風懐旧を題せり、此歌は不破の関屋の程にこそとて疇昔のことく打咲たまふて云給は
す、しゐて問申ければ、さのみとて宣き、浅茅生や、又袖右袖や、袖に置し霜は思有し時をさして

云也、あさちふにをきし霜は思なき時そよし、先々懐旧と云るはふるき事を思出也、然は物お
もひし折節、思もなきおりふしなるへし、扱こそ懐旧の道理をふかく云也、長夜の夢路なれば
哀楽の昔の枕の上に音信侍ルおりふし、妻戸を敲ウ夜半のあらしに夢もかれはてぬる躰也、かゝ
るおそろしき巧なるうたよとて高吟常ならずと云

15 松かねをいそへの波のうつつたへに 頭はれぬへき袖のうへ哉

此歌を語申ければ次に書とゝめ侍ぬ、松かねは待かねと申ぬ、いそへは居と申也、まつ、まち、
五音に申き、打たへは打たえて也、以前を申きは松かねを波の打侍程に袖の上を波におほせ侍
りぬ、うちたえ侍れは何に云なすへき、偏に頭ぬへくと

の事ナシ(九)

月を一月(内) 言語+言語道断(九)

佛+面白影(九) 面白+面白さ(九)

よめり+あるそとはと云は只人の形也、人形はけにも人の形を

木をもてきさむ也、然は心なき身といへり、尚以聞候為に、鴨

は死木也(九)

秘歌+ナシ(内)

程+ナシ(九) 打+又うち(九)

浅茅生や+浅茅(内) 浅茅生(九) 袖や+袖やなり(九)

袖に+袂に(慶)

よし+かし(九) ふるき+ふかき(内) 物+物を(慶・九)

なるへし+あるへし(九) 云也+云へる也(九)

上に+上(九)

ならずと+ならず(九)

「定家」(九)

次に+ついでに(九) 待かね+待かねて(九)

打たへは+うつつたへには(九) 以前+たとへ(九) 程に+

袖に(慶)

16 忘れずはなれし袖もや氷らん ねぬ夜の床の霜のさむしろ

此歌はもし忘れずは其方の袖もや泪なるらん、吾もねぬ夜の床は霜さむき也、寄席恋也、然也

17 袖にふけさそな旅ねの夢もみし おもふかたより通ふうらかせ

夫旅ねのかなしさをなくさむるは夢より外のたのしみはなし、しかはあれと今夜は吾思ふかた

より吹来るかせなれは夢も見ましき也、只袖にふけと申き

18 秘歌 昨日たにとはむと思しつのにの いく田のもりに秋はきにけり

是はさせるふしはなれとも又一ふしに生田のもりは西也、西は秋なれは也、又いはく、いく

はくの田面に秋はと云り

19 思出るおりたく柴の夕烟 むせふもうれし忘かたみに

此御歌は、十月はかりに水無瀬におはしける時、慈円の許へ時雨にぬれてなど仰つかはして次

の年神無月に無常の歌数多あそはしてつかはし侍し事也、たとへは、去年の十月はかりに歌な

とつかはしける程もなく又此神無月に成侍る事を、おりふし思ひ出しければ無常によそへ給へ

る也、思出る折ふしや、しはしの夕烟に咽て過し事を思出るはうれしくもあるへし、其御返事、

慈円、思出るおりたく柴と聞からにたく本すくなきひしられぬ夕烟哉 たくひしられぬはけにも内の御事

なれは焼火はしられぬと云るなるへし

20 久方の月の桂も折はかり 家のかせをもふかせてしかな

月の桂を折と云事は儒者先達の及第也、南殿に儒者とも参集ルに君より題を賜て詩を作侍也、

其内に秀句ありて叡感を蒙ル者は紫宸殿にめされ桂を賜也、桂は御衣也、かさすとは其御衣を

肩にうちかけて出也、桂を折ともかさすとも云也、罷帰ル時は九竜車を賜て内裏の中より乗て

出也、藝能の面白事如此、菅三品などは数多度の事也

21 秋の野に蕙刈ふき作れりし 宇治のかり宮荒まくもおし

うらかせ浦イ秋かせ(九) 「定家」(九)

秘歌―秘歌イ(九) 「家隆」(九)

「後鳥羽院」(九)

仰つかはして―仰被遣て(慶)

事也―中也(九)

又―又此(内) 也侍る―成ぬる(慶) 出しければ―いまし

ければ(九)

思出る折ふしや―ナシ(九) しはしの―柴の(九) 過し―

過候し(九) あるへし―ナシ(九) 御返事―御返事に(九)

ありて―有は(九) 者は―もの(内)

面白事―面目(九)

皇極天皇吉野より近江の比良宮に臨幸の時、宇治の都の跡に一夜留給てけり、其時尾花の宮を造し也

造し也—造候也(九)

22 木からしよ如何に待みむ三輪の山 つれなき杉の雪折の声

此歌は三輪の杉むらは時雨も染る事を得侍らす、まして木からしも一葉もおとし侍らす、縦は、

さありとも雪にはよものかれ侍らし、然は木からしよ、いかに待みむ、つれなき杉も雪折をは

如何と云り

のかれ侍らし—のかれし^{侍イ}(九) 木からしよ—木枯や(九)

23 年闌てまた越へしと思きや 命成けりさよの中山

此歌は、若以色見我以音声求我、是人行邪道不能見如来、西行^キ春秋ふたそちあまりに此文を

心に掛て終にさとり得さりし連^スの事にて侍るにや、今こそ思解侍れ、年闌ても又かくのやう

に悟知へきとは思ひきや、たゝ命也けりさよの中と云り、玄妙なり

「秘歌」(九)
思解—思ひわきまへ(九) 年—^{年歌}ね(九)

24 世をそむく山の南の松かせに ゆめの衣や夜さむならるん

此歌は、安法^ス師あひしれりける人のくま野に籠侍るにつかはしける歌也、此歌を語申たり

しかは、やかて此詩を吟しあはせ賜へり、昔年老鬢蹉跎冷、秋自波陀道路除、けにも是にあは

昔^昔年—暮年(九) 波陀—波陀(九) 是に—此詩に(九)

せて侍れはよくもかなへり

あはせて—吟あはせて(九)

25 月すめは四方のうき雲空に消て み山かくれを行あらしかな

此歌は秀能熊野に詣て侍し時奉りし歌也、月をは神を申奉る、雲は月をかくす物なれとも、月

の光自すめは四方のうき雲もむなしくきゆる也、然は嵐は雲を払物なれとも、むなしくきゆる

間あらしも太山かくれに帰る也

歌也—歌の中に詠る(九)
すめは—すめるは(九)

26 春ははな秋は丹葉といは、いへ 塩干のまつ雪のあけほの

此歌は塩干にたてる松のあけ渡る姿を見れば面白さ中／＼言の葉もおよはず、たとへは春は花

とも云へし、秋は紅葉とも云へくや、花丹葉といふとも争か唯今の景氣には及侍へきと聞えて

姿を—姿(九) 言の葉も—言葉(九)

しかもさにてはなき所也

27 雪ならば幾度袖を払はまし はなのふゝきの志賀の山越

夫彼志賀の山越の事、誠に類少き花の名所也、はなより明てはなより昏る事、言の葉もつくしかたし、都遠郷の客また花ならぬ時も相通道地也、然におもにおへる輩とも花のかけにやすら

ひ侍り、みれははなの風袖にかゝる事、雪にことならず、彼心なきものとも雪ならば幾度か袖を打拂侍らんと也、玄妙不可得也

28 思川たえすなかるゝ水のあはの うたかた人にあはてきえぬや

思の泪たえすなかるゝ恋の身にて有事よ、扱もそも逢事なくて此まゝ消なむ事よと也、此歌は、遍舟芦暗秋風泊、旅店柴疎曉月扁、と云る詩にてみるへし、遍舟は小舟なり、芦間によせて泊侍は秋かせ計を問来ると也、旅店は柴垣たにもうすくして曉の月独訪わたり侍り幽に見え侍を、思の泪のたえすと也、あはれ此まゝあはて果へきにやと云わたりかすかなり、あしまに泊ぬる小舟はさこそ有侍らぬ唯秋かせのみ友と也、旅店の柴たにもかこひかねたる扁を曉の月のみ問来^ル躰、此歌のさまにかなへり、能吟あはせて味をなめ侍て水と氷のことくにせよ

29 月かけに身をやかへてあはれてふ ひとの心をいかゝみるへき

此御歌、寄月恋、天曆御製也、たとへは月かけに身をかへ侍らんとは、月はあらはなる事也、

是にかへ侍りて連さしのひ侍る心のやみをあらはさては、いかてか人の心をも見侍らんとの給ひき、ふかき御歌のさま也

30 秋かせにおとはすれともはな薄 ほのかにたにもみえぬ君かな

是は躬恒かうた也、いつくしくよめるうたとて吟し給へり

31 うつゝとも夢ともみえぬほとはかり かよはゝゆるせ下紐の関

是は能宣朝臣女のもとへ云つかはしけるとみえたり、たとへは現とも夢ともとは、いまたかよ

都一都鄙(九) 相通一相通る(九) 道地一道理(慶) 輩
とも一ともからは(九)

雪に一くもに(内) 心なきものとも一無心の者共(九)

「伊勢」(九)

思一思ひ川(九)

訪わたり侍り一とふらひ侍るわたり(九)

かすかなり一幽なる(九)

と也一ナシ(内)とと也(九)

氷の一氷との(九)

身をや一身をもや(慶、も右補) いかゝ一いかて(九)

見侍らん一見るらん(内) の給ひき一の給き也(九)

もとへ一もとに(慶) かよふとも一通ふ(慶)

ふとも人めにみえぬ時、下紐をゆるくせよと云る、通なれなはけにとは顕や侍らんと也

ゆるくせよと云る―ゆるせよと云り(九) 通なれなは―かよ

32 いさや又かはるともしらす今社は 人の心をみてもならはめ

ひなれは(九) けにとは―けに今は(内) 顕や―顕(内)

和泉式部人かたらひたる男のもとより、忘るなどのみ云をこせ侍りければ

侍りければ―ければ(九)

33 扱も猶えやは伊吹の下草の あとなきしにも思ひ消南

下もえに思ひわたれる事、猶云出る事は猶如何にて侍る、吾思は伊吹の下草也、此下草は蓬なり、此思ひをありともせぬは跡なきしも也、水剋火也、蓬は火、霜は水なれば、水火をうつす

歌也

34 朝日さす高根の雲はにほへとも ふもとのへはしらすもあるかな

へは―人は(慶・九)

亡父卿、花巖経の高山頓説の心をよせ給へるよし語給へり

語給へり―語給へは(内)

35 願は心の月をあらはして 鷲のみやまにあとを照さむ

是は後京極摂政、舍利講によめる、舍利のことをさして心の月と云る事けにもとこそおほえ侍れ

36 君すめはよする玉も、瑩出つ ちよもつたへよわかのうらかせ

瑩出つ―みかきはてん(九) ちよも―千代を(九)

是は家隆卿か新古今竟宴歌

37 小泊瀬のはなのさかりやみな河 みねよりおつる水のしら波

此歌はをはつせのはなもみなに成侍るやらん、嶺よりおちぬる水の色と計いへるにや

38 春の夜の月はかりとや詠まし 散くるはなのかけなかりせは

月はかりなる物とやみ侍らん、散ぬる花のあたなる事にて見れば、月はせめて月夜ももある

夜も―夜にも(九)

よしにてなくさめる也、月前落花と云ることをよめる、經信

云ることを―云事(九)

39 いはつゝしいはてやそむる忍山 心のおくの色をたつねて

露とも時雨ともいはてつゝしに忍山を染させ、心のおくなと云侍るを、亡父卿感せられければ、

まことしからねと自讃しぬ

まことしからねとまことしからね共(九) 自讃しぬー自讃
して(内) 自讃仕ぬ(九)

40 石見かた高角山に雲晴て ひれふる嶺を出る月かけ

南山に雲起れば北山南降程、又一ふし珍敷おはしましける、御製同題

程一躰(内) おはしましけるーおはしける(内) 同題一題
月、後鳥羽院(九)

41 まこと、は誰かおもはむ独見て 後に今夜の月をかたらは

是は西行上人のよめるよし語申たりければ、ありくくと云出られけりとして褒美常ならず

42 ふらぬ日もふる日もまかふ時雨哉 木葉の後の嶺のあらしに

松風似霰と云事を讀賜へは、けにも面白聞え侍る物かな、松風の時雨なれば木葉の後と見え

たり

43 行てみぬ心のほとを思やれ 都の内の越のしら山

何そや此越の白山の内に有ける事は、たとへは堀川院や覽、位におはしましける時、南殿の北

面に雪山作らせ給へるよし、内なる人のかたに周防内侍申つかはしける

44 梅のはなそれともみえず久かたの あまきる雪のなへてふれ、は

あまきは、ろうくとしたる也

45 なにはつにさくや此花冬こもり 今ははるへとさくやこのはな

此歌は同字病のやうにて、しかも同意をのかれ侍るかな、其故は日本記にかやうに見えたり

浪華津尔開哉木花冬籠今者春部与發榮花、初は梅花也、後のは榮花也、難波津に開や梅花に

てあるへし、今は春へとは榮花をはつし賜へると也、王仁大王か胸の内、思惟分別あるへし

46 吾うへに露そ置なるあまの川 とわたるふねのかひのしつくか

此歌は業平朝臣、東山の山庄に籠居侍て、病に沈み、かきりなく有しに、二条后、尼なりける

時、つきそひてあつかはれける也、病おもければものをも食給はず、吾飢にや、つゆそをくな

吾ー然は我か(九)

る、末後の水をすゝめけるとなり、天河は尼なり、是は奈何にも工夫に乗すへからす

47 月やあらぬはるや昔の春ならぬ わが身ひとつはもとの身にして

此歌は月もむかしの月、春も昔の春也、さてこそ月や昔にあらぬはる也、昔にあらぬ吾身ひとつはもとの身と云るは、皆世中のならはしには悲侘侍りて、はや一度物云かはし侍れば心をひとつになす習也、しかはあれと終にふたゝひ逢侍らす、こゝを吾身ひとつはもとの身と云り、此歌業平法文也

48 年もへぬ祈る契ははつせやま 尾上のかねのよその夕暮

此歌あはすして年もへぬ、待事を入相に悦、別るゝ事をあかつきのかねに悲しむは皆世上の常也、されはこそ尾上のかねのよその夕くれにて年もへぬ、又祈る契りもはつせの観音を頼む計也、思積りて年をふると泊瀬の祈念とに何そあはさらんや、祈念なれば也

49 筑波やまやまもあけねと吹かせに 人の心そすまてつれなき

此歌は寄山恋、家隆か家集を見るに、たとへはすきもなく茂りあひたるやまなれとも、かせのたよりにはなひく慣也、然は青根もあらはるゝなり、つれなく窺かたきは思ふかたの人の心也

50 松しまやをしまの月も何ならず たゝきさかたの秋の夕くれ

是は秋の名所の月をそしるにあらす、眼前の月に対して松嶋をしまの名を忘却するなり、然は名にあらすと云り

51 いつもきく物とや人のおもふらん こぬ夕くれのまつかせの声

是は、かせいつも聞物ながら、こむと云侍るを待折ふしには、そよや人かと思侍る也、扱こそこぬ夕くれの待かせの音也

52 なき人のかたみの雲や時雨覽 夕の雨に色はみえねと

すゝめける―すゝむる(九) 是ひ―是等は(九) 奈何にも

―なかにも(内)

秘歌―ナシ(内)

云る―云事(内)

云り―云へる(九)

秘歌―ナシ(内) 「定家」(九)

待―る(内)

折る―かゝる(内) 折る事(九)

なれば也―なれば(九)

秘歌―ナシ(内) 秘歌イ(九) あれねと―あけぬと(内) あ

せねと(九) すまて―際も(九)

あらす―ならず(九)

「後京極」(九)

「後鳥羽院」(九)

是は無常なれば、かたみの雲は烟なるへし、夕の雨は泪なり、又かたみの雲となるさま、夕のなみたにかきくらしして、朝の名残のくもをたにも見侍らぬよしなり、下の七文字、夕のやうに聞えて、しかも朝云出る言也、是は不思議の躰、争及奉るへき、暮雨朝雲愁恨多と云々

53 侘ぬれは今はおなしにはなる 身をつくしてもあはんとそ思ふ

雲と一雲と云へる事は鳥辺野の夕のけふり朝には雲と(九)
名残の一名残(九)
云出る一いひつる(九)
秘歌一ナシ(内) 秘歌イ(九)

此歌は忍あまる也、おなし難波なるは、おなし名にはなる也、かやうの名には立侍れとも、身の命をかきりあはむとおもふ、槐花雨潤新秋地、桐葉風涼欲夜天、槐花はえんしゆの花也、初秋に咲るなり、新秋なればあはれなる躰也、桐葉風涼、夕の時節、誰人か恋渡らさらんや、槐花は日かけに映してうきくとみゆる物也、然は日かけのうるはしき下の時雨は、くもれははれくする也、是はおなし名になる也、新秋地は侘ぬれはなり、欲夜夫と云るに身をつくしてと云り、詩歌合と云るも世にゆくしき大事なり、此ほんくあそこ爰に三五記の詩歌書入侍は、雪上の霜と哉らんなれば、学ふへき道をさたしことに書と、め、彼此みる次に見侍らは、けには胸中の道具ならさらめや

54 いつまでか泪くもらて月はみし あき待えても秋そかなしき

うきくと一うるくと(慶・九)
ほんく一ほんくの(九)
なれは一なれ共(九) ことに一こゝに(九) けには一けに(九)
道具一道具共(九)
「慈円」(九)

此歌は秋の感也、月の面白きにうちむかひて、老のなみたをことはる也、然は何迄かと云り

然は一然らは(九) 云り一云へる秋に成ても昔の秋也そと云へり(九)

55 やまさとに契し庵やあれぬ覽 またれんとたに思はさりしに

此歌はやまさとにていつく来て相ともにすむへきよし堅約束し侍しに、其時は是非共にとかたく心に定侍し程に、人にまたれむとは思さりしをと也

56 しめ置いていまはと思ふ秋山の よもきかもとにまつむしのなく

此歌は亡父卿八十八年西山の辺に山庄を結給て、臨終正念に住せしめむとのみ思ふ節折、内より百首のうたよみて奉れと有ければよめり、しか有ければ今はと思ふと云り、秋山とはさかの

いつく来て一いつくまで(九)
しめ置いて一しめ置(内)

やまを云りけり、松虫のなくとはあはれなる躰を云り

57 忘行人故空をなかわれは たえく／＼にこそ雲もみえけれ

何時最是思君處、月入斜窓曉寺鐘、此詩歌とも申侍へし、忘行は別行也、絶く／＼のくもは横雲の空也、何時か尤別行空そとなかわれは、月のみまとに残し曉の鐘のおりふしなり

58 心あるをしまのあまのたもとかな 月やとれとはぬれぬ物から

此歌の心を申侍らは、本よりあまは無心なるへし、月をやとさむとぬらさしよし袂に心ありと云かけたるなるへし、然はあれと猶月やとる袖ともしらす、た／＼にして置ければ、心有と云り、

をしまのはおしまぬと云り、るはれ也、のはぬ也、五音相通也

59 はなみれはいとく家路そいそかれぬ 待らむと思ふ人しなけれは

故園の桃李看無益、情在旧遊不在花、此詩歌ともに物あはれなる体也、しかあれは吾家路を思ふに、可待者もなきは物あはれなる躰成と申へし、故園桃李も思有身には、みるにあやなしと

云へし、待へき人もなしと云心は、そこはく旧遊にあらん、かゝるおりふしは花をも見るにかくうらみあるへし

60 なからへは又此比やしのはれん うしとみしよそ今は恋しき

城柳宮槐漫揺落、秋悲不到貴人心、と云る詩にて吟あはせらるへし、城柳宮槐揺落するおりふしのかなしさは言の葉も及侍らし、去とも又秋のかなしさは只身一の事なるへし、其折節はまた此比やしのはれむと也、是は詩歌ともさせる大事をはふくまされとも、詩に合侍る事はゆゑ

しき大事也、吾よりかたのやうに申侍詩歌ともによくかなへり、細々に吟合て味をしるへし

61 津国のなにはの春は夢なれや あしのかれ葉にかせわたる也

今日不知誰計会、春風春水一時来、是は春のかせ春の水ともに一時に來りしかは、いまはあしのかれ葉になれるかせなり、然は夢なれや、如此の光陰の過去事、**来**字不可得の理も一時の

よしかし(九)

あれとあれとも(九)

五音一五韻(九)

ともに一にも(九)

躰成一躰など(内) 躰となるへし(九) あやなしとあやなしとも(九)

しとも(九)

なしとなきと(九)

らるへしせらるへし(九)

言の葉も一ことはの葉も(九)

事は一事(九)

申侍一ナシ(内) 申侍り(九)

ともに一にも(内) 來りしかは來しか(九)

かせにさそはれぬ、此時の風光は誰か会せむや、故に此詩歌、有心躰と定申

62 沢におふわかなならねと徒に としをつむにも袖はぬれけり

亡父卿の言書云、百首の歌の中に寄若菜述懐と云事をよめり、此歌は述懐なからわかなを讀り、大切之事也、然もことふきになむ侍とて如何あるへき、たとへは老を沢に生ると云、つむを年をつむと云なせる也、是等の心つかひ能く思惟せよとそ宣き

63 物思へは色なき風もなかりけり 身にしむ秋の心ならひに

此歌は堀川院八月わたりに隱賜て後、十月計にかせの音を聞に、あはれなり、それは物思侍れは心無物にも心をつけ、物ことにあはれにて佛に立と也、八月に准奉は秋の心ならむなとは申也

64 今は又ふらてもまかふ木葉かな ひとりしくるゝ庭の松かせ

此歌は、此間は木葉のをとを雨かと疑しか、散果侍れは、今はふらてもまかふと云り、其故は、独時雨ゝ庭の松はふりもせねとも独と云り、如此歌能く思惟分別最用なるへし

65 桜咲遠山鳥のしたりおの なかくし日もあかぬ色かな

此躰は桜開遠山鳥のしたり尾の永日もあかぬ色かな

66 まとろまで詠よとてのすさひ哉 麻のさ衣月にうつこゑ

此歌はさせるふしはなけれども、まとろみ侍て詠よとてのすさみ哉と云り、詞すくなにて品多

しとは是やらむ、月前擣衣を題す、心無物に心を付て、手すさひにうちて聞

67 雲はみな払はてたる秋かせを 松に残して月をみるかな

風光は「風光(九) 誰か誰かはかり誰か(九) 有心躰と

「有心躰に(九)

ぬれけりぬれける(内)

とて「とては(九)

とそ宣き「との給き(九)

「あはれなり…物ことに」脱(九)

准「はなれ(九) 心ならむなとは申「心ならむなと申(九)

散果「散はて、(九)

せねとも「せぬとも(内)

詠よとての「ねなまし物(九) すさひ「すさみ(九) 「宮

内卿「(九)

なけれども「なけ共(九) 侍て「侍らて(九) すさみ「す

さひ(慶) すくなにて「すくなにして(九)

心を「心(内) 聞「聞へきなと云へり(九)

此歌は、雲は皆拂侍であれども、松の木間を出かてに月を見れば、松に風もかなと心を残す也

68 いはさりき今来む迄の空の雲 月日へたて、物思へとは

此歌は、物思へとはいはさりき、今来む迄の空の雲とは、むかへる月いは、一とせ也

69 野辺の露は色もなくてやこほれつる 袖より過る萩の上かせ

秋恋を題す、吾袖の千入の色には争か野辺の露の色は及へき

70 思入ふかき心のたよりまで みしはそれともなき山路哉

是は深山恋を題す、いは、只徒に恋侘て月日を送り侍らんよりは、いかなる太山にも身を捨侍らは、をのつから恋の心もよはり行也、恋やせんと心ひとつをたよりとして深山に行は、更にあとへにみ帰なり、身をすつる程の心のたよりさへさもなくてやみなむは、かやうに申へし

71 吾恋にははのむら萩うらかれて 人をも身をも侘の夕暮

二八、佳人竟何若、昨日憐他今憐身、此詩歌を聞奉て侍れば、兼々心をかけ仰天倒地、事にて侍れは、神の御恵今こそと覚え、心に世上の外をもとめ、感涙肝に銘しぬるおりふし、三種の大事情の事よとて先度の心をへ給り、云、二八、十六歳也、佳人はいつくしき人也、十六七の年さかりを、たとへは如此なる盛の佳人も終には老果て、誠に世情のたよりもきはまりぬ、昨日は人の上、けふは我身の上になりぬ、此詩をあはせて讀侍れば、吾恋は庭のとは二八也、村萩は搦して萩は紫なる物なり、女によそへならはせたり、村萩は盛さかぬ萩を云り、是十六七なり、うらかれては老はてたるなり、物のあはれなる風情に云なしければ、人をもあはれになり、身をもあはれになせり、かく云り、老はて、云るにあらず、かやうの理を思知侍らは、唯命のうちに問侍れかしと云り、是等の深秘たるうへ一子に相傳あるへし

72 清みかた関にとまらて行舟は あらしのさそふ木葉也けり

萩・萩(内・慶)

秋恋―此歌秋の恋(九) 千入の―ちしほ(九)

よはり行也―よはりもて行て(九) 行は―分行は(九) 更に―猶切也、是はこと更に(九) あとへにみ―あとへに(内) あとへみ(慶)のみ(九) かやうに―けにか様に(九)

「秘歌」(九)

御恵―めぐみ(九)

先度―先詩(九) 云―いは、(九) 二八ハ―二八ノ(内) 如此なる―必此なを(九) 如イ

になりぬ―のみ也(九) 此詩を―此詩に(九)

ならはせたり―ならはせり(慶)

云なしければ―いひなれければ(九)

老はて、―老はて(内) 理を―ことはり(九)

是等の―是等(九) 相傳―傳(九)

清見かたは海邊の関也、彼在所の面白さあまりの事なれば、言の葉も及かたし、此面白さに万事忘却し侍は、関のおもしろさも又以忘ぬ、扱こそ関にとまらてあらしと云り、木葉は舟のそへ物なり

73 木間よりもりくる月のかけみれば 心つくしの秋はきにけり

此歌は、秋は西より来る物なれば、つくしの秋と云り、いつも申事に侍れとも、上には木間よりくるかけは、さなから待とをにて心をつくすと聞え、下には西を云り

74 あかねさす昼はこちたしあちさへの はなのよひらに相みてるかな

こちたしとはことなし也、ちはと五音連声也、はなのよひらは夜と云り、昼はことなし夜と云り

75 あまつ姫御嫁和共せしいまや あらふる神のはしめ成覽

此歌、世々の始の事誰もしれる事なれとも、眞實をは不知、此時始て天の瓊鉾を指下すと云、天のさかほことは嫁の根なり、男女二神の嫁を云、二神は定妻の二根也、天の浮橋の上とは人の念の生所を云、二義有、一は虚空の義、虚空の義とは、形なし初生死也、二は念之義か相

共に形ありて初の發念也、嫁故念と云、此二義相共に衆生之命根也、瓊鉾と云は男根也、海

と云は女根也、鉾滴は二神の精也、一ノ嶋となるとは和合の形也

76 去来爰に吾世はへ南菅原や伏見の里のあれまくもおし

此歌は古今の中の肝心也、讀人を可秘、札の裏書名有、忝も天照大神と見え奉時人に託宣して宣、此国を吳国より亡ほさん事のかなしきに、住之此国を守覽と思ふ也と云、下日本伏見と云事、二神の嫁を見書たりし故也、此御歌を此書の肝心に書入奉るへきよし思ひ侍れとも、餘おそろしくて也、然とも爰思惟叶はず偏に冥慮申承りぬ

77 思ひやる姨捨やまも月の比 いつも心は三吉野、奥

あらしと一行舟はあらしと(九) 木葉は一木葉(九)

いつも一いつもの(九)

くる一もりくる(慶) もめくる(九) 聞え一聞て(九)

相みてるかな一あひみてしかな(九)

夜と一夜にと(九)

虚空の義とは一虚空の義と云は(慶)と云は(九) 初生死也

初イ 物生故也(九) 念之義か一念の義(九)

初の一初て(九)

宣一の給く(九) かなしきに一悲さに(九) 住之一住て(九)

見書一見出(慶・九) 此書の一此書(九)

爰テ一爰(内) ここにて(九)

此歌は家隆卿の云、世上に心有人、三吉野の奥に身を、かはやとねかはぬはなし、又月をみる比、姨捨山を思ひやらさる輩はあらしと也

78 玉箒春のはしめに手折もて 玉のをなかくさかふへき也

是は實のなりたる松の枝を申也

79 君かよのひさしかるへきためしには 神そうへけむすみよしの松

此歌、たそやかねてそと云る

80 むら玉のすたれの内の人かけは さたかにもなき花の色かな

此むら玉は妻戸を三四間もつゝけて立侍たるを云そ

僧正遍昭は歌のさまはえたれとも實少、たとへは絵にかける女をみて徒に心をうごかすかことしと云

81 名にめて、おれるはかりそおみなへし 吾落にきと人にかたるな

此花、女郎花なれば馬よりおるゝを法躰の身なれば、おつるなどゝいへはいたつらことなり、

草花をみてかく物云かはすは絵にかける女と見てなり

在原業平は其心餘て詞不足、萎花の色なくて匂残るかことし

82 月やあらぬはるや昔の春ならぬ わか身ひとつはもとの身にして

此歌は、月も昔、春もむかしと云るは、花の色なふしてにほひ残れる也

文屋康秀は詞は巧にして其さま身におはす、いは、商人の鮮衣きたらんかことし

83 吹からに秋の草木のしほるれは むへやまかせを嵐と云らん

此歌、吹はこそ草木もしほれ侍、しかあれはあらしと草木のしほるゝはやまかせのあらかし侍

たそや―たそやこの(九) 云る―云へるは(九)

むら玉は―むら玉とは(九) 立侍たる―立たる(内) 云り

―云そ(内・九)

實―まこと(九) みて―ナシ(九)

なれば―おれは(内) なれ共(九)

云かはすは―いひかはす(九) 女と―女を(九)

此歌は―此歌(九) 花の色―しほめる花の色(九) なふし

て―なうて(九)

康秀は―康秀(九) 鮮衣―よき衣(九)

秋の―野への(九)

あれは―あれと(慶) あらしと―あらしを(内) あらしとは

(九) あらかし―あらし(九)

と讀り、此あらし、こゝろは巧にして上にはやまかせをあらしなと云るか、心はあらしたるかたなれば、心は心身は身也

宇治山僧喜撰か歌は詞幽にして始終たしかならず、いは、秋の月のあかつきのくもにあへらんかことし

84 吾庵は宮古のたつみしかそすむ 世を宇治やまと人はいふ也

讀る歌多く聞えねは彼是通してよくもしらす、然とも凡は吾住庵は世をうきすまると人はいへ

とも、都の喜撰也と云り、良は吾名字也、則えらふとも讀る字ならねは、都にえらひ云ると自稱す

小野小町は古の衣通姫の流也、いは、よき女のなやめる所有にたり、つよからぬはおうなの歌なればなり

85 思つゝぬれはや人のみえつらん ゆめとしりせはさめさらましを

さむましき物をとほ、さもあらぬことをかく云なせる、よはきさまなり

大伴黒主は其さまいやく、いは、薪おへるやま人の花のかけにやすめるかことし

86 かゝみ山いさたちよりてみて行む としへぬる身は老やしぬると

たきゝをおへるは腰かゝめ老人のことし、鏡山たちよりて見てゆかむ躰はけにもやま人のはな

のかけにやすむかことし

此あらし―此わたり(九)

心は―心(九)

宇治山僧―宇治の僧(九) 詞―詞は(九) たしかならず―

たゝしからず(九)

讀る歌―読歌(九) 通して―遍して(内) うき―のき(内)

いへとも―いへと(内)

良は―たつみは(九) 字ならねは―字なれば(九) 云ると

―出ると(九)

流也―流れ也(九) いは、―歌のかゝりはあはれなるやうに

てつよからず、いは、(九)

さむましき―さめましき(九) とは―などは(九)

いやく―いやく(九) 薪―薪を(九)

かゝめ―かゝめたる(九) ことし―如して(九) 躰は―躰

(九)

やすむかことし―やすむ躰か如し(九)